

ルソン島北部における土器作り村の調査

—— カガヤン州、アトル村における試掘調査 ——

田中 和彦、アマリア・デ・ラ・トーレ*

I. はじめに

フィリピン諸島には、まだ土器を製作する村が数多く存在する。その数は、調査報告が出ているものに限っても40数ヶ所が数えられる。これまで、こうしたフィリピン各地の土器作り村において、製作技術、使用実態、販売形態と経路などの様々な調査¹⁾が行われてきた。しかし、残念なことに、これらの土器作り村がいつ頃できたのか、あるいは、いつ頃から土器を作り始めたのかは全くわかっていない。

ところで、ルソン島北部カガヤン (Cagayan) 川流域における土器のはじまりは、少なくとも B.C. 3000 年紀まで遡ることが明らかになっている (Snow et al 1986, Tanaka and Orogo 1996)。そして、それ以降の土器の変遷の実態については、カガヤン川下流域のラロ貝塚群における層位的発掘調査によって解明されつつある (青柳・Aguilera・小川・田中 1988, 1989, 1991, 田中 1997, 1998b, 1998c, Tanaka 1998a, 1998b)。

この一連の調査は、いわば古い方から土器の変遷を解明していくことを意図したものであるが、それとは逆に現在から土器作りの伝統がどこまで遡るのかという探究方法も考えられよう。その際に問題となるのが、現在存在する土器作り村がいつ頃から土器を作り始めたのかという事である。

その解明には、いくつかの方法が考えられるが、最も有効な方法の一つとして考えられるのが、考古学的な発掘調査を行うことである。

ところで、カガヤン川中流域地帯については、現在 3 箇所²⁾の土器作り村あるいは土器製作者のいる村が確認されている。本稿は、その一つであるカガヤン州、イグイグ (Iguig) 町、アトル (Atulu) 村において行った試掘調査の報告³⁾であり、それに二、三の検討を加えたものである。

II. アトル村の位置と立地

アトル村は、ルソン島北東端にあるカガヤン州の南部にあり、州都トゥゲガラオ (Tuguegarao) から 15km 程北上した所にある (Fig. 1)。この村は、行政的にはイグイグ町に属し、イタウェス (Itawes) 族が中心の村である。世帯数は、139 世帯⁴⁾でそのうち約半数が土器作りに従事している。

カガヤン川は、州の名の由来となった川であるが、この州のほぼ中央部を南から北へ流れてバブヤン海峡 (the Babuyan Channel) に注いでいる。カガヤン州に入るのは、この川の下流域と中流域の南半分⁵⁾である。アトル村は、カガヤン川東岸に立地している。カガヤン川東岸地帯は、トゥゲガラオからアトルへかけて、ゆるやかな低丘陵が断続的に連なっている。アトル村は、このような丘

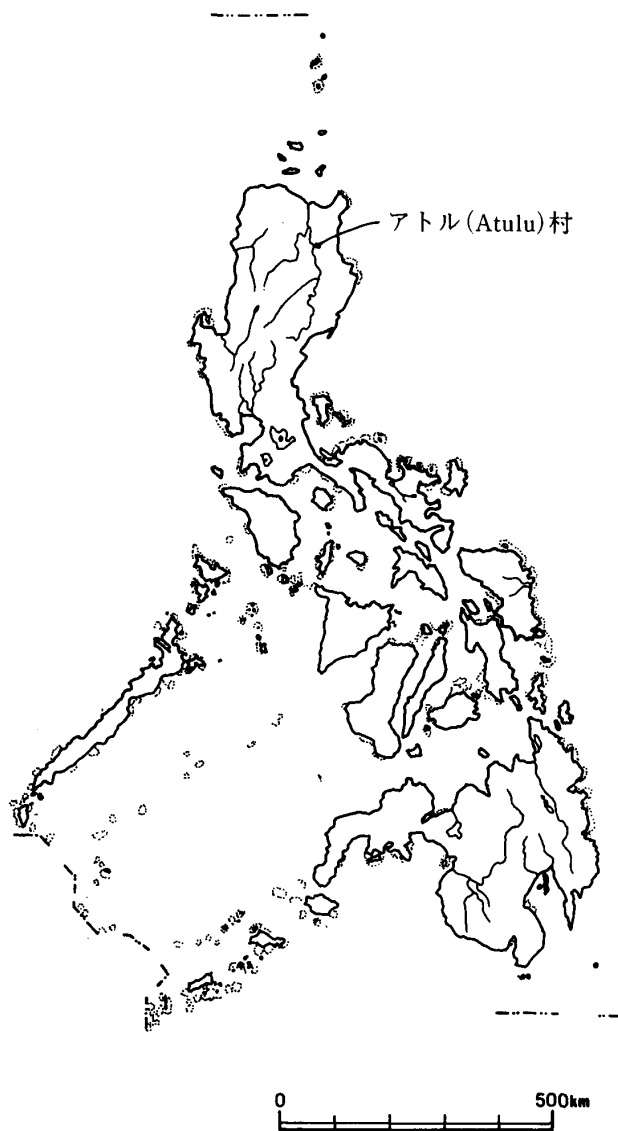


Fig. 1 ルソン島北部、カガヤン州、アトル村
位置図

Location map of Atulu in Cagayan Province, Northern Luzon

陵の一つに立地する村で、丘陵の頂部及び東側斜面を中心に家屋が立っている。

Ⅲ. 調査研究史

本村においては、すでに青柳洋治氏が主に製作技術を中心とした調査（青柳 1980）を1977年に

行っている。その後、フィリピン国立博物館民族部門のA・バルボサ（Barbosa）が土器製作技術の習得について調査（Barbosa 1987）を行い、同博物館同部門のN・クアドラ（Cuadra）氏がやはり土器製作技術の調査（Cuadra n. d.）を行い、同博物館考古学部門のT・ロアレス（Roales）女史が土器文様スタイルの調査を行っている。

また、1982年にスパファ（SPAFA）の考古学者のトレーニングがこの村で行われた。⁶⁾

Ⅳ. 調査

ここで報告する土器作り村の試掘調査は、1993年10月31日から11月12日にかけて、筆者の一人田中がフィリピン国立博物館の考古学部門のスタッフと共同で行ったカガヤン川中流域遺跡群のサーヴェイの際にあわせて行ったものである。⁷⁾

Ⅴ. 調査隊の人員

筆者と共同で本村の試掘調査を行ったフィリピン国立博物館考古学部門のスタッフは、調査官のアマリア・デ・ラ・トーレ（Amalia de la Torre）女史、サイエンティフィック・イラストレーターのメルビン・ガルシア（Melvyn Garcia）氏、技官のユスタキオ・ラリオス（Eustaquio Larios Jr.）氏、運転手のジミー・ファビラ（Jimmy Fabila）氏及びフィリピン国立博物館第2地方分館の技官、ロリト・ソリアノ（Lorito Soliano）氏である。また、実際の試掘調査に際しては、試掘地点の土地所有者であるユヘニア・バリシ・クンタパイ（Eugenia Balisi Cuntapay）さん及びアトル村の住人のスシ・バンギバン（Susi Banguibang）氏

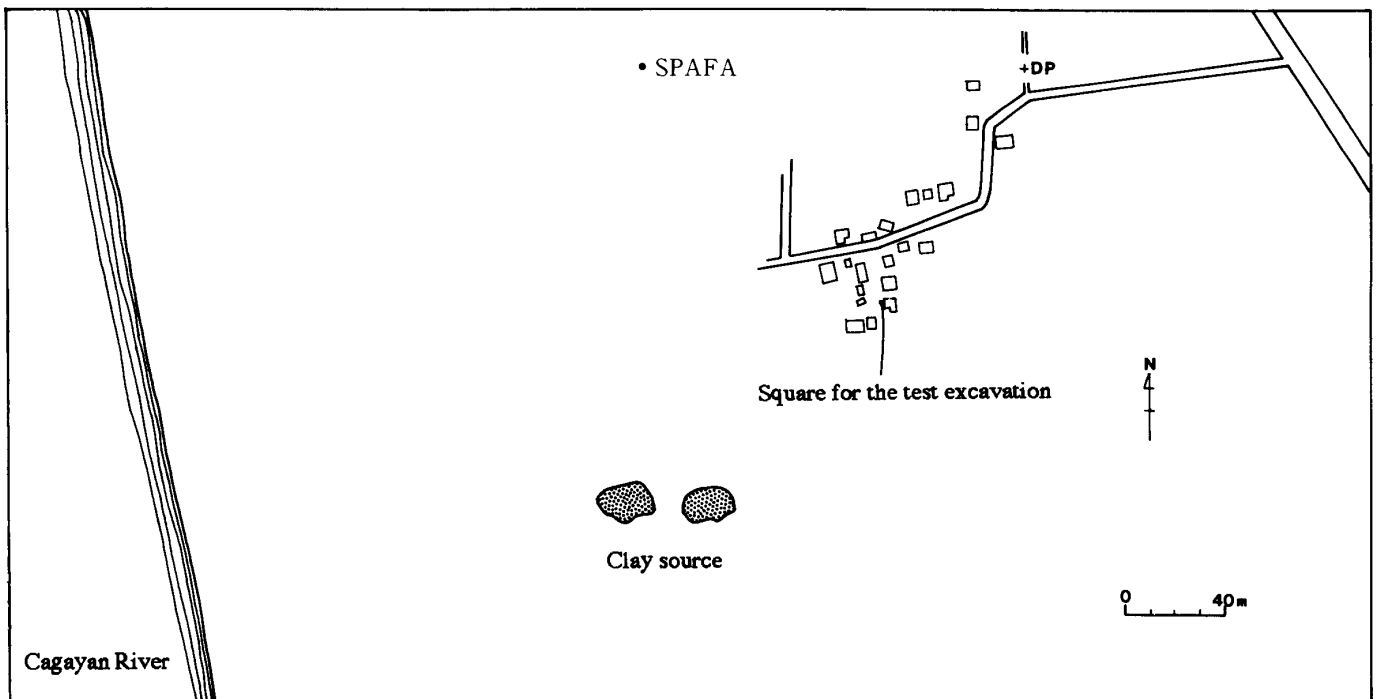
が作業員として働いてくれた。

VI. 試掘坑の位置と大きさ

本調査に向う前にマニラのフィリピン国立博物館で行った調査計画の話し合いの中で、同博物館考古部門の長であるW・ロンキリオ（W. Ronquillo）氏より示唆をうけ、調査期間中に本村で試掘調査を行うことを予定していた。しかしながら、村のどの地点を発掘調査するかについては、現地で決定することになっていた。

現地到着後、我々はまず、村長への挨拶を行い、知人を訪問し、情報収集を行った。その中で、知合いのスシ・バンギバン氏より近くの家が建て

替えを行った際に新たに掘った柱穴からガラス瓶と陶磁器の破片が出土したという情報をえた。そして、それらの遺物の所在を確認した所、まだ、バリシさんが所持している事がわかり、さっそく実見した。その結果、ガラス瓶、陶磁器ともに現在この地域で見られるものではない事がわかり、これらのものの出土地点とされる所の近辺で試掘調査を行うことに決めた。すなわち、試掘坑は、バリシ氏の家の東側に接して設定された。この地点は、村が立地する低い丘陵の頂部にあたり、直線距離で西方のカガヤン川まで約300m、東方の国道まで約195mの位置にある（Fig. 2）。設定された試掘坑の大きさは1×1mである。



Original map was made by Mr. Melvyn Garcia

Fig. 2 アトル村試掘坑位置図

Location map of the square for the test excavation in Atulu

VII. 層 序 (Fig. 3)

地表面下約80cmの深さまで掘り下げを行い以下の三つの層を確認することができた。

第Ⅰ層：暗褐色土層

粘性が強く、しまりも強い。微小な木炭片が混入する。

第Ⅱ層：赤褐色土層

第Ⅰ層に比べて赤味が強い。また、粘性、しまりともに強い。直径5cm程の礫を多数含む。しまりが非常に強いため、掘り下げが困難であった。

第Ⅲ層：黄褐色土層

第Ⅱ層に類似した土に、所々、黄色土が斑点状に入る。しかし、礫の混入は少なくなる。しまりは非常に強い。遺物の出土はみられなかった。

VIII. 家の立て替え時に出土した遺物

バリシさんが家を立て替える際に、高床住居の柱を埋めるための穴を掘っていて出土したとされる遺物が2点ある。すなわち、1点がガラス瓶の底部片で、もう一点が染付碗である。以下では、各々の特徴について見てみたい。

ガラス瓶 (Fig. 4-1, Pl. 3)：円形の底面を持ち、側面は、底面から直立する形態の瓶である。上半部の形態は、欠損していて不明である。底面は平坦でなく、中央部が内側に山状に窪んでいる。底面の直径は、6.2cmを測り、窪んでいるのは、中央の径5.2cmの部分である。最も窪んだ部分での窪みの深さは、2.3cmである。

また、ガラスの色調は、全体に黄緑色を呈し、

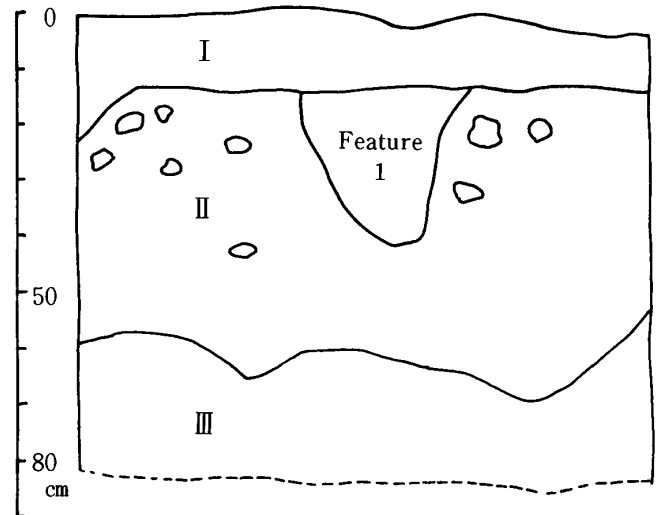


Fig. 3 アトル村試掘坑北壁断面図

Soil profile of the north wall of the excavated square in Atlu

内面は、エナメル質の紫がかった色調を呈する。こうした特徴から、本製品は、ワインボトルの破片であると考えられる。

染付碗 (Fig. 4-2, Pl. 4)：口唇部が外反し、胴部がほとんどふくらみを持たずに底部まですぼまる碗である。口径12cm、器高4.7cmを測る。高台部は、外側に開き気味に直立し、高さが1cmである。また、高台畳付の部分は、幅が約2mmと狭い。また、高台内底部には、ヘラ切り痕と考えられる痕跡がある。施釉は不均一で、特に高台が胴下部につく付け根の部分では、釉の厚い箇所と薄い箇所ができています。また、釉の表面には、径0.5mm程の小さな穴がポツポツとあいている。高台外面は施釉されるが、畳付き部分は無釉である。また、高台内は、一部の箇所を除き施釉されている。一方、内面は、見込み部分が円形に釉はぎされている。この円形部分の直径は、約6.2cmである。胎土の色調は乳白色で、胎土中には、微粒の黒色粒子がまばらに含まれている。文様は、くすんだ灰青色の呉須で、⁸⁾ 靈芝文が外面に流れる様な筆致で

連続して描かれている。

IX. 試掘調査による出土遺物

遺物は全部で92点出土している。それらを種別でみると、鉄釘2点、ガラス片2点、貝片4点、土器片84点である。

そして、これらをさらに層位別でみると、第Ⅰ層からは、鉄釘2点、ガラス片2点、貝片4点、土器片49点が出土し、第Ⅱ層からは、土器片31点が出土している。そして第Ⅲ層からは、遺物が全く出土していない。他に、1号柱穴から土器片が1点出土している。また、発掘坑壁面出土の土器片が3点ある。

(1) 第Ⅰ層出土遺物

鉄釘は、2点出土し、大きさが大小ある (Pl. 5-A)。大きいものは長さ4.9cm、小さいものは長さ3.2cmを測る。

ガラス片も2点出土し、最大幅3cmのものと1.8cmのものがある (Pl. 5-B)。いずれも、小片で、こういった器形のものの一部であるか不明である。しかしながら、大きな方は、青味がかった色をしており、小さな方は透明である。

貝片は4点出土し、いずれも小片であるが、全て同種の二枚貝の破片と考えられる (Pl. 5-C)。カガン川下流域地帯に棲息し、同地で捕獲されている (小川1997) カビビ (Kabibi) と現地では呼ばれる貝 (学名: バティッサ・チルドレニ *Batisa childreni*) であろう。

土器は、49点の破片が出土している。それらの大きさをみると、ほとんどが最大幅約1.8~4.2cmの中に入る小片である。部位でみると、47点が胴

部片で、2点が口縁部破片である。口縁部破片は、1点が鉢形を呈すると思われるものの破片 (Fig. 5-1, Pl. 6-1) で、もう1点 (Fig. 5-2, Pl. 6-2) が甕形を呈すると思われるものの破片である。どちらも、内外面ともに研磨されており、光沢をもっている。胴部片 (Pl. 6-3~18) は、いずれも内外面ともに研磨されており、光沢を持っている。ほとんどが細かく割れた小片であるが、割れ口が摩耗していない点は注意される。以上はいずれも無文の土器であるが、胴部片の中に有文のものが1点 (Fig. 5-3) だけある。文様は、波形をした浅い沈線文が2段施されている。

(2) 第Ⅱ層出土遺物

第Ⅱ層から出土した人工遺物は、土器だけである。破片総数は、31点でいずれも無文である。それらのうち、4点が口縁部破片になり (4点とも互いに接合して1点になる)⁹⁾、27点が胴部片である。口縁部破片 (Fig. 5-4, Pl. 7-1) は、風化が顕著で、その部位認定が困難であったが、写真に見られるように、上部が丸味を帯びており口唇部と考えられる。また、破片中央部には、屈曲がある。器形は鉢形を呈すると考えられる。胎土の色調は、表面下芯まで黒色である。また、胎土中には、粒径1~2mm程の石英粒が多数混入する他、粒径3mm程の白色粒子、粒径1mm程の黒色粒子と赤褐色粒子が含まれていて質は粗い。また、胴部片 (Pl. 7-2~14) も先の口縁部破片と同様な混入物を胎土中に含んでいるものが多く、質が粗い。また、破片の状態は、第Ⅰ層出土土器と異なり、本来の表面が見られない。また、各々の破片の縁部の角の部分は、風化して丸味を持っているものが多い。

X. おわりに

本論でみたように、ルソン島北部カガヤン州の土器作り村、アトル村でおこなった試掘調査の結果、二つの遺物包含層を把握することができた。そして、両層から主体的に出土する土器が各々胎土の質といった性格を異にすることが明らかになった。このことから、両土器群には、時間的な前後関係が考えられることが明らかになった。

各々の層の土器を見るならば第Ⅰ層から出土する大半の土器は現在、本村で製作されている土器に質及び研磨の方法が類似する。また、第Ⅰ層中に含まれる多くの微小な木炭片は、土器焼成作業と関連づけられる可能性がある。こうした点からみると、現在作られているタイプの土器がこの村で作られるようになったのは、比較的新しいことであり、それ以前は、異なる質の土器を作っていたか、あるいは、村自体が全く違った地形的景観をもっていた可能性が明らかになった。ただし、第Ⅱ層は、礫を多く含み、そこから出土する土器は、風化が顕著であることから、同層の形成が通常の居住による堆積の結果ではなく、川の氾濫等の作用による可能性があることが示唆された。そのため、第Ⅱ層の土器は、限ずしも本村で使用されていたと断定することは難しくなった。そして、第Ⅱ層の形成過程を知るために、第Ⅱ層がどのような面的広がりを持つのかを明らかにすることが今後の課題となった。将来、さらにいくつかの試掘坑を設定して調査する必要があるだろう。

また、遺跡の年代については、家の立て替え時に出土したガラス瓶と染付碗が手がかりになるだけである。出土したガラス瓶はその特徴からワインボトルと考えられる。ワインボトルは、ヨーロッ

パにおいて、底部径の大きなずん胴形のものから細形のものに変化することがわかっている (Goddio and Jay 1988)。この変化から考えて本遺跡のものは18世紀後半あるいはそれ以降のものと考えられる。また、染付碗も、その形態と文様からみて、18世紀後半から19世紀中葉のもの (大橋 1995) であろう。しかしながら、今回の試掘では、こうしたガラス瓶や染付碗に関連する遺物は見い出せなかった。この点の解明も今後の課題として残される。

18世紀後半から19世紀中葉の時代はスペインの植民地期にあたる。スペインの植民地期には教会等の建造物が多数作られるが、カガヤン州ではそうした建造物の素材がレンガである。こうしたレンガの製作地と土器作り村の関係も今後解明すべき課題である。

註

- 1：フィリピンにおける土器作りの研究史の流れについては、『環境情報研究』第6号において概観した (田中 1998 a)。また、各々の研究については、参考文献にあげたものを参照のこと。
- 2：三箇所の土器作り村とは、本稿で扱うアトル村の他、イサベラ (Isabela) 州、サンタ・マリア (Sta Maria) 町、キナガビアン (Kinabatangan) 村とトゥゲガラオ市、アトゥラヤン (Atulayan) 村である。
- 3：本稿をまとめるにあたっては、平成10年度敬愛大学環境情報研究所個人研究費の助成を受けている。
- 4：試掘調査時 (1993年11月) に村長ビセンテ・

ルソン島北部における土器作り村の調査

タギアン (Vicente Taguian) 氏から得た情報による。

5：下流域とは、カガヤン川河口からカガヤン川とチコ (Chico) 川の合流点までを指し、中流域は、上記の地点からカガヤン川とマガット (Magat) 川の合流点までを指す。

6：この時クンタパイ (Cuntapay)、ラムサオ (Lamsao)、タギアン (Taguian) 三氏の所有地で試掘調査が行われたことが国立博物館の遺物台帳からわかるが、この調査に関する報告はまだ出ていない。

7：他の遺跡のサーヴェイの成果については、Tanaka and de la Torre 1995を参照のこと。

8：霊芝はマンネンタケのことで、瑞祥の象徴とされる薬草である。

9：集計は台帳における登録をもとに行った。台帳づけのあとで接合作業を行ったため、接合資料は異なる遺物番号をもっている。

謝 辞

本稿を作成するにあたり、フィリピン国立博物館考古部門の W・ロンキリオ (Ronquillo) 先生、同部門の E. ディソン (Dizon) 博士、上智大学アジア文化研究所の青柳洋治先生、東京外国語大学の小川英文先生の教示をえました。記して感謝致します。

参考文献

青柳洋治

1980 「ルソン島北部における土器づくり
ーアトル村の一事例ー」『黒潮の民族・

文化・言語』黒潮文化の会編 角川書店
88-104.

青柳洋治・Aguilera, M. A.・小川英文・田中和彦

1988 「ラロ貝塚群の発掘」『上智アジア学』
第6号、63-104.

1989 「ラロ貝塚群の発掘(2)」『上智アジア学』
第7号、101-131.

1991 「ラロ貝塚群の発掘(3)」『上智アジア学』
第9号、49-137.

宇野文男

1974 「バシー文化圏における土器づくり」
『季刊人類学』5-1：126-148.

大西秀之

1998 「土器製作者の誕生ーカンカナイ社会に
おける技術の伝習と実践」『民族学研究』
62-4：470-493.

大橋康二

1995 「九州における明末～清時代の中国磁器
の出土分布とその内容について」『青山
考古』第12号、55-68.

小川英文

1997 「貝塚洪水伝説ーフィリピン、ルソン島
北部カガヤン河下流域における貝採集民
の民族考古学」『東南アジア考古学』第
17号、119-166.

鹿野忠雄

1941 「紅頭嶼ヤミ族の土器作り」『人類学雑誌』
56：41-49.

小林正史

1992 「縄文土器から弥生土器への調理方法の
変化ー民族誌資料を参考としてー」『日
本考古学協会第58回総会研究発表要旨』
日本考古学協会、98-101.

- 1993 「稲作文化圏の伝統的土器作り技術」『上智史学』18:7-32.
『古代文化』第45巻、第11号、27-50.
- 田中和彦 (欧 文)
- 1993 「フィリピン完新世・先鉄器文化編年研究序説」『東南アジア考古学会会報』第13号、173-209.
- 1997 「カトゥガン (Catugan) 貝塚の発掘調査」『東南アジア考古学』第17号、210-225.
- 1998 a 「ルソン島北部、カガヤン川中流域、サンタ・マリア町、キナガビアン村の土器作り」『環境情報研究』第6号、123-152.
- 1998 b 「サン・ロレンソⅢ貝塚 (シリバン遺跡) の発掘調査とその問題」『東南アジア考古学』第18号、263-287.
- 1998 c 「ルソン島北部、ラロ貝塚群、バガッグⅠ貝塚の発掘調査と若干の問題」『上智アジア学』第16号、171-211.
- 1999 「フィリピン、ラロ貝塚ー巨大貝塚の発掘と成果ー」『季刊考古学』第66号、75-78.
- 鳥居龍蔵
- 1897 「東部台湾、阿眉種族の土器製造に就て」『東京人類学会雑誌』135号、1976刊
『鳥居龍蔵全集』第11巻 朝日新聞社再録、561-572.
- 1902 「紅頭嶼土俗調査報告」1976刊
『鳥居龍蔵全集』第11巻 朝日新聞社再録、281-328.
- 西谷 大
- 1991 「海南島における土器づくり」『国立歴史民俗博物館研究報告』第31集、29-43.
- 量 博満
- 1973 「タイ国北部における土器作りについて」
- Aoyagi, Y., M. L. Aguilera Jr., Ogawa, H and K. Tanaka
- 1993 Excavation of Hill Top Site, Magapit Shell-midden in La-lo Shell-middens, northern Luzon, Philippines. *Man and Culture in Oceania* 9:127-155.
- Barbosa, Artemio C.
- 1987 Psychology of the Atulu potters of Cagayan, Philippines-as manifested in their tradition *Spafa Digest* Vol. VIII No.2: 11-18.
- Cole, Fay-Cooper
- 1922 *The Tinguian, -Social religious and economic life of a Philippine tribe-*. Field Museum of Natural History Publication 209, Anthropological series Vol. VII, No.2: 231-493.
- Cuadra, Nicolas
- n. d. Ethnographic report on Atulu potters. M. S.
- Goddio, Frank and Evelyne Jay
- 1988 *18th Century relics of the Griffin shipwreck*. World Wide First.
- Intoh, Michiko
- 1990 Ceramic environment and technology: A case study in the Yap Islands in Micronesia. *Man and Culture in Oceania* 6: 35-52.
- Longacre, William A.
- 1985 Pottery use-life among the Kalinga,

ルソン島北部における土器作り村の調査

- northern Luzon, the Philippines. Ben A. Nelson (ed.) *Decoding prehistoric ceramics*. Southern Illinois University Press, Carbondale and Edwardsville, 334-346.
- Longacre, William A. and James M. Skibo (eds.)
1994 *Kalinga ethnoarchaeology -Expanding archaeological method and theory-*. Smithsonian Institution Press. Washington and London.
- Rice, Prudence M.
1987 *Pottery analysis -A sourcebook-*. The University of Chicago Press.
- Scheans, Daniel J.
1977 *Filipino market potteries*. National Museum Monograph No.3. Manila, Philippines.
- Skibo, James M.
1992 *Pottery function : A use-alteration perspective*. Plenum Press, New York.
- Snow, Bryan E. and Richard Shutler, Jr.
1985 *The archaeology of Fuga Moro Island-New approaches for the isolation and Explanation of diagnostic ceramic assemblages in Northern Luzon, Philippines-*. San Carlos Publication, University of San Carlos. Cebu City, Philippines.
- Snow, Bryan E., Richard Shutler Jr., et al
1986 Evidence of early rice cultivation in the Philippines. *Philippine Quarterly of Culture & Society* 14 : 3-11.
- Solheim, William G. II
1952 Pottery manufacture in the Islands of Masbate and Batan, Philippines. *Journal of East Asiatic Studies* 3 : 49-53.
- 1954 Ibanag pottery manufacture in Isabela, Philippines. *Journal of East Asiatic Studies* 3 : 305-307.
- Spoehr, Alexander
1973 *Zamboanga and Sulu - An archaeological approach to ethnic diversity -*. Ethnology Monographs No.1. University of Pittsburgh.
- Tanaka, Kazuhiko
1997 The kite photography of Bangag I Shell-midden Site, Lal-lo, Cagayan, Philippines. *Journal of Southeast Asian Archaeology*, No.17, 197-209.
- 1998a Preliminary report of the archaeological excavation of Catugan Shell-midden (Dumbrique Site), Lal-lo, Cagayan, Philippines, *Bulletin of Chiba Keiai Junior College*. No.20, 149-177.
- 1998b Problems and excavation of San Lorenzo III Shell-midden (Siriban Site) , Lal-lo, Cagayan, Philippines. *Bulletin of Showa Academia Musicae* No.18, 109-135.
- Tanaka, Kazuhiko and Amalia de la Torre
1995 Preliminary report of the archaeological survey in four sites in the middle reaches of Cagayan River, Northern Luzon : Discovery of several stone adzes and pottery, in Yeung Chun-tong and Li Wai-ling Brenda (eds.) *Conference papers on Archaeology in Southeast Asia*. The University Museum and Art Gallery, The University of Hong Kong, 191-210.

Tanaka, Kazuhiko and Alfredo Orogo

- 1996 Preliminary report of the excavation of the Pamittan Site, Lanna, Solana, Cagayan. Paper presented Fifth Philippine Studies Conference, Honolulu, Hawaii.

Ushijima, Iwao and Lilian C. de la Peña

- 1996 The pottery traders of Maripipi, Biliran, Leyte : Past and present. In *Binisaya nga kinabuhi, Visayan life* (Visayas Maritime Anthropological Studies II, 1993-1995) edited by I. Ushijima and C. N. Zayas. CSSP Publications. University of the Philippines : 139-166.

Zayas, Cynthia Neri

- 1996 Pottery making in Maripipi in *Binisaya nga kinabuhi, Visayan life* (Visayas Maritime Anthropological Studies II, 1993-1995.) edited by I. Ushijima and C. N. Zayas. CSSP Publications. University of the Philippines.

* フィリピン国立博物館研究員

ABSTRACT

Test Excavation of a Pottery Making Village in Atulu, Iguig, Cagayan Province, Northern Luzon

Kazuhiko TANAKA and Amalia DE LA TORRE

Ethnographic and ethnoarchaeological studies at a number of pottery-making villages were conducted at various parts of the Philippines. As archaeological excavations at a pottery making center were rarely conducted in the Philippines, this work is important in order to clarify their history and different activities involved in producing potteries. The problems to be addressed will be archaeological.

This is a report of the archaeological test excavation of a pottery making village in the middle reaches of the Cagayan River, i. e. to be specific in Atulu, Iguig, Cagayan. The research was conducted by Kazuhiko Tanaka and a team from the National Museum headed by Ms. Amalia de la Torre.

One 1 x 1m square was set up on the top of a hill where the village was located. The excavation reached the depth of 80cm from the surface. The location to excavate was chosen because the landowner, who dug up a post hole while construction of his house was done, found a glass bottle and a blue and white bowl. The glass bottle and a blue and white bowl were probably dated to the latter half of the 18th century or later. But, no similar nor related artifacts were found during this test excavation. The excavation revealed the following :

- (1) The deposit was composed of three layers. Layers I and II contained artifacts. But Layer III was sterile.
- (2) Earthenware sherds were uncovered from Layers I and II but the colors of the pastes of main sherds were different. The characteristics of the earthenware sherds from Layer I was similar to those of much contemporary pottery (the pottery presently produced). The sherds from Layer II are different from those found in Layer I.
- (3) The presence of stones and the weathered conditions of artifacts in Layer II showed actions and / or effects of the river.

Further research will be needed, since this was only a test excavation. What will be recommended is to have an extensive research to be able to map the activity areas of a pottery making village and to understand more freely the horizontal stratigraphy of the place.

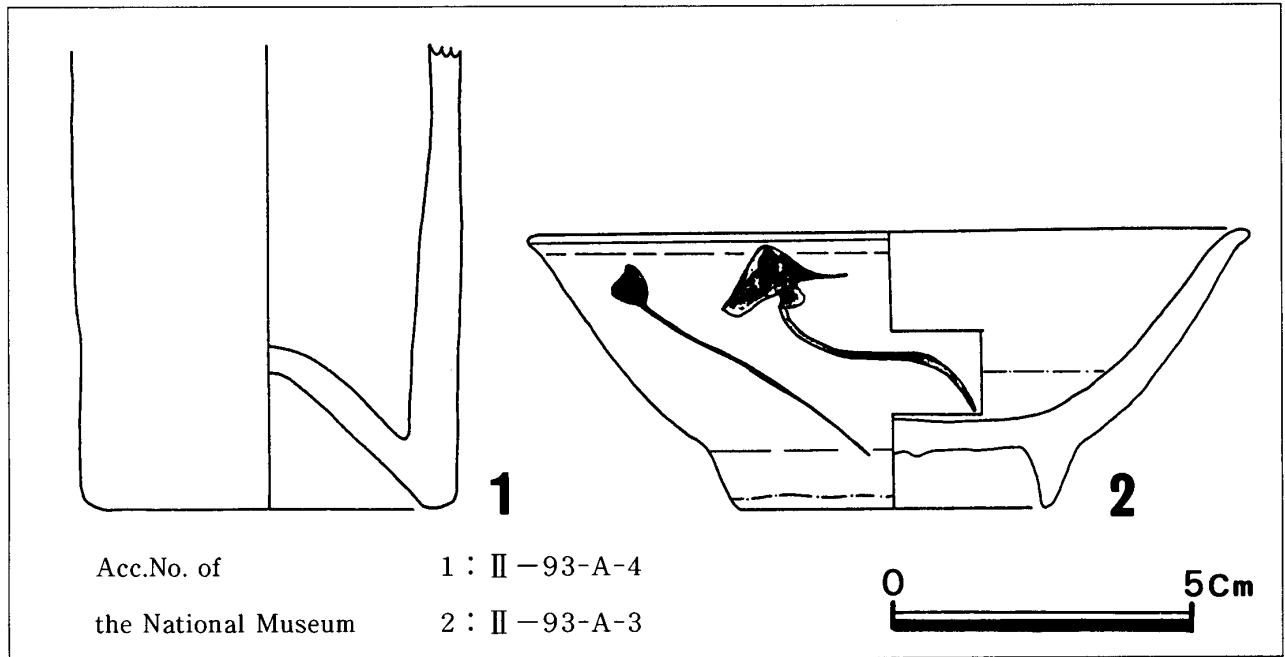


Fig. 4 家の建て替え時に出土した遺物実測図（1. ガラス瓶、2. 染付碗）

Figures of artifacts found during the reform of the house

(1. glass bottle, 2. blue and white bowl)

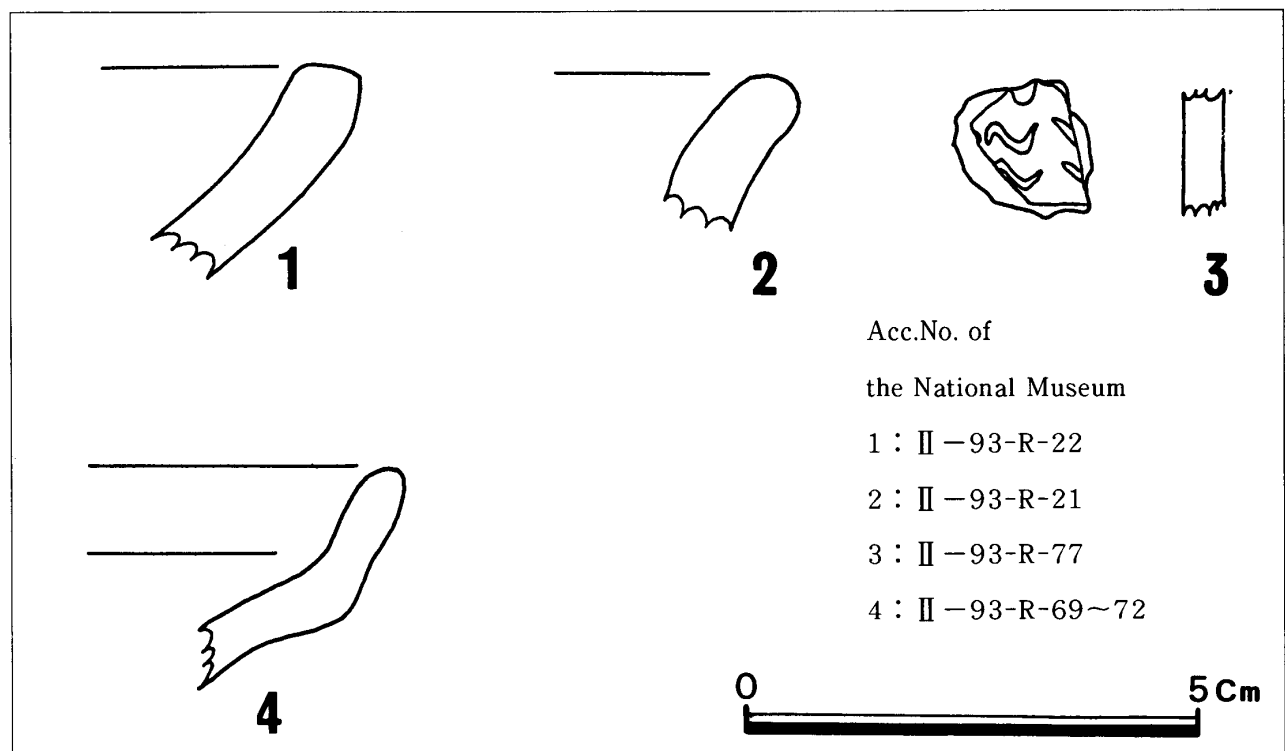


Fig. 5 出土土器実測図（1～3：第Ⅰ層出土土器、4：第Ⅱ層出土土器）

Earthenware sherds found during the excavation

(1～3 : found in Layer I, 4 : found in Layer II)

ルソン島北部における土器作り村の調査



A. 試掘坑の設定
(Establishing of the square for the
test excavation)

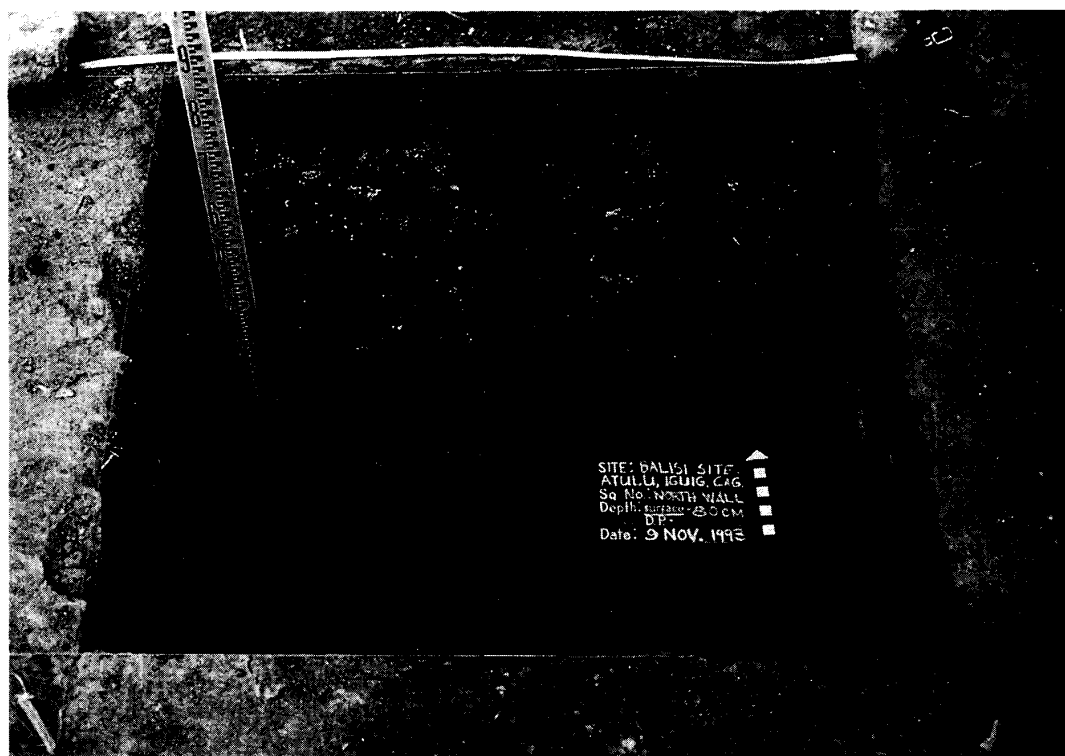


B. 測 量
(Mapping)



C. 試掘坑の発掘
(Excavation of the square for the
test excavation)

Pl. 1 アトルー村における調査風景
Research scenes in Atulu



Pl. 2 試掘坑北壁断面

North wall of the excavated square



各スケール全長10cm

Acc. No. of National Museum

II-93-A-4

Pl. 3 家の建て替え時出土ガラス瓶

A glass bottle found during the reform of the house



Acc. No. of the National Museum
II-93-A-3



各スケール全長10cm

Pl. 4 家の建て替え時出土染付碗

A blue and white bowl found during the reform of the house

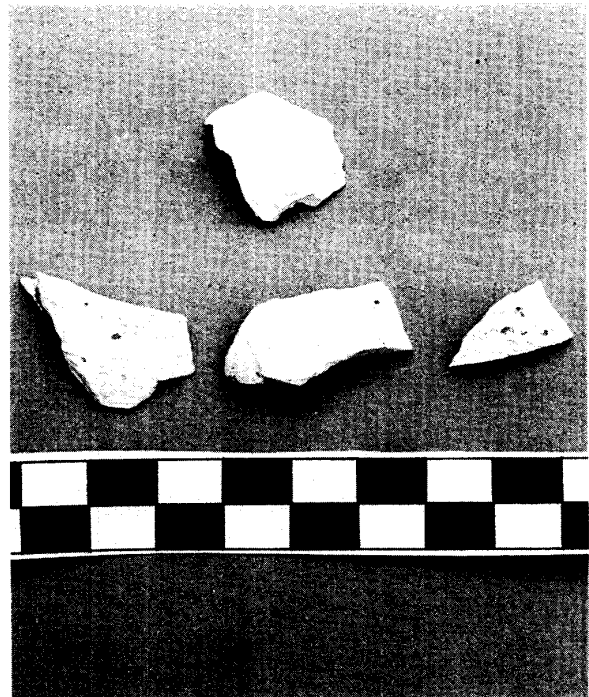
ルソン島北部における土器作り村の調査



(A)



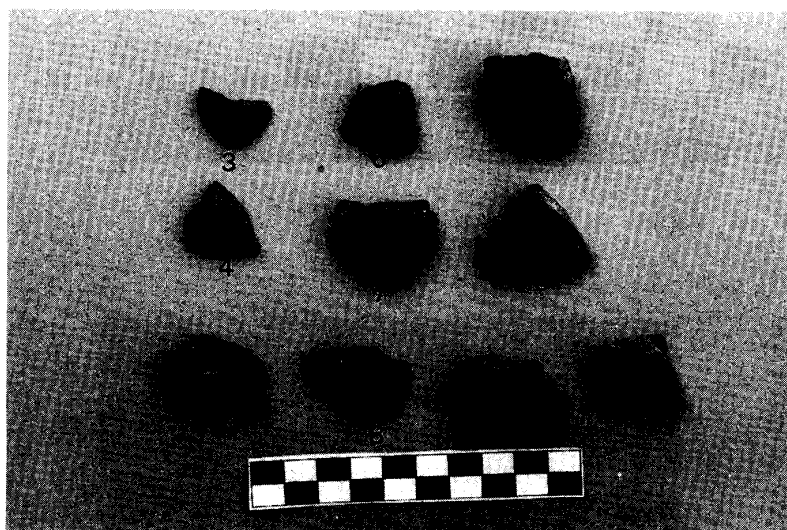
(B)



(C)

Pl. 5 第I層出土鉄釘(A)、ガラス片(B)、貝片(C)

Iron nails (A), glass fragments (B) and shell fragments (C) excavated in Layer I



Acc. No. of the National Museum

(1 : II-93-R-22)

(2 : II-93-R-21)

(3~12 : II-93-R-9~18)

respectively

(13~18 : II-93-R-23~28)

respectively

各スケール全長10cm

Pl. 6 第 I 層出土土器片

Earthenware sherds excavated in Layer I

ルソン島北部における土器作り村の調査



Acc. No. of the National Museum

(1 : II -93-R-69~72)

joined

(2~8 : II -93-R-51, 52, 54~58)

respectively

(9~14 : II -93-R-59~64)

respectively

各スケール全長10cm

Pl. 7 第Ⅱ層出土土器片

Earthenware sherds excavated in Layer II